

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 日本語論説文の文章構造

氏 名 Didik Nurhadi

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、日本語の文章構造、特に文章の統括性を課題として分析した。研究の動機には、インドネシア人日本語学習者から、日本語の文章を構成するそれぞれの文の意味は理解できるのに、文章に内在している文脈展開や書き手の主張する意見がよく分からないという悩みをしばしば耳にした経験が要因となっている。このことは、日本語の文章やその文脈展開には構造上の特徴があること、そしてその特徴を明らかにする研究が求められることを示唆しているのではないかと思われる。

そこで、本研究では、日本語文章論の先行論を踏まえ、「(1) 反復表現から見た文章構造」、「(2) 提題・叙述表現の関係から見た文章構造」、「(3) 見出しの反復から見た文章構造」(以上、ミクロレベル)、「(4) 叙述表現の観点による開始部と終了部の構造」、「(5) 開始部と終了部との呼応関係による文章構造」(以上、マクロレベル)という5つの課題を設定し(第1章)、両言語における文章構造の特徴を検討した。

課題(1)では、両言語の文章構造に関わる特徴を検討するために、文章全体の構造にまたがる語句の反復がどのように文章の文脈展開と統括性に関与するかという課題をとりあげた。これにより、両言語の文章における文脈展開と統括性のあり方を把握した上で、その特徴を基盤として、文章構造を検討した。その結果、日本語の文章では、関連語句の反復表現は様々な次元、具体的には、同一語句のみならず、同義・類義関係、対義的關係、上位関係・下位関係などの関係で文章構造の全体にわたって反復が行われ、話題が維持されていることが分かる。そのため、文章中における関連語句の反復表現は一見したところで目立たない言語表現となる。これに対して、インドネシア語では、文章の統括性は主に、同一語句の反復表現と代名詞、指示詞で形成されている。その結果、文間の意味的まとまりは一見したところでも明示的である(第2章)。

課題(2)では、日本語の社説の構造における統括性を提題表現と叙述表現の観点から考察し、日本語の3紙の新聞社説を考察した結果、日本語の文章構造の類型として、

A～D型の4つが設定でき、A型が50%で最も多く、次いでB型が39%で、この2類型で89%を占めることがわかった。日本語においてはA型とB型の文章構造が2大類型をなすことが指摘できる(第3章)。一方、インドネシア語の文章では、A型、B型の2類型のみであった。これは日本語の社説文章における、2大類型と一致するが、型の多様性という点で特筆すべき違いがあるといえる(第4章)。

課題(3)では、見出しの反復表現を分析観点とし、文章の中心段を認定して日本語とインドネシア語の文章構造を類型化し、その特徴を分析した。両言語の文章を調査した結果、日本語の社説の文章は終了部反復型(文章の終了部に反復があるもの)が多いのに対し、インドネシア語の社説文章は開始部反復型(文章の開始部に反復があるもの)が最も多いという相違点を確認できた。また、見出しは文章中のどこかの部分で反復され、書き手の主張を表すものとして、文章の中心段や主題文を把握するために重要な手がかりとなることが確認できた。また、両言語の文章構造類型の分布をみると、日本語は多重反復型の文章がわずか1例1%であるのに対し、インドネシア語は全体の31%を占めているという結果となった。また、日本語文章では書き手の主張が何度も繰り返されるという特徴が見られない一方、インドネシア語の社説文章では、主題文が文章の開始部、中間部、終了部の、2箇所以上で提示される文章も少なくないことがわかった(第5章)。

課題(4)では、文章の開始部と終了部を構成する文の叙述表現の分布の様相を分析した。

日本語文章では全体的な特徴として、開始部においてこれから述べる話題についての事実の文が配置され、話題の予告が述べられるのに対し、終了部は書き手の判断を表す意見の文で構成される。さらに、その表現形態を調べた結果、日本語の文章ではいずれも、評価を示すものが多いことが分かる。評価表現の多用は両言語に共通の特徴であるが、インドネシア語では「seharusnya(～シナケレバナラナイ)」「semestinya(シカルベキ)」等のような強い表現が、日本語文章の意見文は「～ガジュウヨウダ」「～ガモトメラレル」「～モライタイ」など比較的弱い表現が使用される。

一方で、インドネシア語の文章では、開始部、終了部ともに書き手の見解判断を表す意見の文で構成されるものが多く、特に意見の文が2度(あるいはそれ以上)連続的に繰り返される類型が開始部で全体の68%、終了部で65%と過半数を占めることが分かる。この点は開始部が事実の文で構成される割合が高い日本語と比較して大きく異なるといえる。

ただし、終了部に意見の文が多く出現することが両言語における共通点である。日本語においてもインドネシア語においても、論説文としての社説文章はこのような終了部の特徴によって、文章論的に一定のジャンルとして特徴づけられると考えられる。(第6章)

課題(5)では、文章全体の構造を構成する部分としての開始部と終了部との呼応関係がどのようにして文章の統括性を形成するかについて調査した。その結果、「A 言語形態に基づくもの」「B 推論に基づくもの」という大きく2つの類型が抽出できた。

分類Aは形態的特徴から、「A.1 話題の回帰」、「A.2 課題・質問 - 解決・答の関係」、「A.3 時間的關係」、「A.4 対照的關係」という4類に下位分類でき、両言語ともA1、A2が多いこと、A3は日本語のみに観察されることが分かった。

一方、分類Bは、開始部と終了部との呼応関係が一般知識に基づく推論によって導かれるものである。両言語とも1割強と少ないながら一定の割合を示し、この類型の存在が、文化的背景を事にする学習者にとって文章読解の困難さの要因となっている可能性が指摘できる(第7章)。また以上の観察は、5つの観点からそれぞれ得られたものであるが、総合的に考察すると、相互に矛盾せず、連関があって補完的であることが確認できた(第8章)。

本研究では、インドネシア語と比較して日本語の文章構造がどのような特徴を持つかを次のように結論づけた。インドネシア語の文章では話題が導入されると同時に、主観的な見解判断や疑問や読み手への働きかけによって書き手の主張が開始部で明示される。また全体にわたって、文の接続や話題の展開が、接続表現、指示表現、同一語句の反復、さらに疑問文と応答文、あるいは先行文の予想に後続文で応じるなどの明示的方法で示される。これに対して日本語では、第一に全体的傾向として、終了部で書き手の主張が示される類型がとられ、開始部で事実を述べる叙述表現や引用表現、すなわち客観的に出来事や様子を述べる叙述表現で話題が導入される傾向が見られる。開始部では、書き手の主張は明示されにくい。第二に、一定の指示詞や接続詞、見解判断を表す叙述表現によって話題ごとのまとまりが形成される。ただし話題の展開は、多様なレベルの関連語句で示され、暗示的である。第三に、終了部が文章の全体的構造を締めくくる中心段となる。これは、一様に見出し文の反復や書き手の見解判断や読み手への働きかけなどを示す表現の多用といった特徴から認められる。